

曹洞宗天祐山公田院仁叟寺
本尊木造拈華釈迦如来坐像並びに脇尊木造阿難迦葉立像
修理及び台座光背制作報告書



天祐山公田院
じん そう じ
仁叟寺

平成24年9月17日
開眼会法要厳修

—— 目次 ——

住職挨拶	1
責任総代挨拶	2
仁叟寺御本尊様釈迦三尊像修復経過報告	3
仁叟寺木造釈迦如来坐像並びに木造阿難・迦葉立像修理及び 台座・光背復元制作報告書	4
仁叟寺本尊様釈迦三尊像修復事業(収支)中間報告	32
仁叟寺で行ったこれまでの御尊像修復報告(三十一世代)	33
志納者芳名簿	34
開眼会法要式次第及び随喜尊董寺院御芳名	37

御礼挨拶



仁叟寺三十一世住職
渡辺 啓司

思えば長き刻と本当に数多くの方々との「ご縁」の賜物でありました。平成12年から足掛け7年、『仁叟寺誌』が発刊されたのが平成19年でありました。その間に、本格的な仁叟寺の仏像調査がなされ、それに基づく仏像部門の寺誌350頁に亘る詳細な報告書が作成されました。その調査執筆を担当して頂いた事がきっかけとなり、江戸時代中期の修復を経て損傷の激しかった仁叟寺御本尊様釈迦三尊像の修復協議が開始されたのが、平成17年秋の事でありました。以来、何度も総代人・世話人合同会議にて慎重に審議を続け、平成21年秋、いよいよ満を持して御本尊様修復に着手致しました。その後、約3年の期間を要し、平成24年春4月に、室町時代五百年仏の「荘厳」且つ「優美」な、そして「やさしさ」溢れる釈迦三尊像の御姿に甦り、無事に当山に御還座致しました。

特に、当寺全檀信徒及び篤志信者の皆様方には、一致協力して浄財篤志納等賜り、念願成就する事が出来ました。御先祖様に対する確固たる尊崇の念と篤き信心に対し、改めまして深く感謝申し上げる次第です。誠に世話になりました。更に、佛教造形研究所所長本間紀男先生始め岡部央先生他同所員の皆様方には、我が国屈指の卓越した技術と誠意に依り、見事な往時の御姿に完成させて戴きました事、厚く御礼申し上げます。

秋晴天の好日、曹洞宗宗務総長・全国總和会会長の佐々木孝一老大宗師大導師の下、法縁御寺院尊董老師各位の御隨喜御荷担をかたじけなくし、また喜び溢れる多数の檀信徒皆様方の御臨席を戴き開眼会法要が修行されました。

御開山様及び歴代住職諸大和尚品位、また檀信徒各位の御先祖様方に報告と御礼が出来ました事、只々有難く、香を薫じ、合掌し、礼拝を尽くして御礼とさせていただきます。

最後に、当寺御本尊様の廣大無邊の限り無き御加護が、皆様方に行き渡り、お護り下さる事を心より祈念致しております。

平成24年9月17日 吉祥日

御本尊様釈迦三尊像 修復終了にあたって



仁叟寺責任総代
井上正俊

去る4月2日、木造釈迦如来坐像と脇侍木造阿難立像、木造迦葉立像が五輪桜の咲く仁叟寺にお帰りになりました。3年弱の長い修復作業でした。富士山麓にある佛教造形研究所所長 東京芸術大大学院元助教 本間紀男先生の手により素晴らしい仏像の姿になりました。

室町時代からの御本尊様であり崇高さと温もりを持ち本堂に尊厳さを感じさせます。誠に慶賀にたえません。

思えば、仁叟寺誌編纂時全域に在る仏像調査の中で、高崎市指定重要文化財の貴重な仏像であり大事にしなければならないことが指摘されました。

平成17年に初めて仏像修復が合同役員会で発議され任職様より慎重で丁寧な説明を受け数度にわたり慎重に論議を重ねました。

その後、合同役員会の総意で檀信徒の御理解御協力を得た上で慎重に推進し今日この様に開眼会供養の運びとなりました。

当寺の三十一世代にわたる御住職とその関係者に室町末期から崇め守り続けられた御本尊様であります。同時に檀信徒の幾多の係わりもありました。

今回の仏像修復に関する事業も檀信徒の皆様御理解御協力なしには到底考えられません。これも日頃の菩提寺と檀信徒各位の相互理解が確かなものでなければなりません。

今回の事業で大切な事柄の一つに確かな修復者、日本有数の仏像彫刻研究家の本間先生に依頼できたことです。

三位一体という辞どおり熟慮に熟慮を重ねた御住職と檀信徒の皆様御協力、それに本間先生の献身的な修復作、どれを欠いても今日の成果は上げられません

今後も寺の繁栄充実と共に御本尊の守護も永遠に続くものと考えられます。

菩提寺が益々安心安らぎを求める心のよりどころにならんことを祈念致します。

本日は、ありがとうございました。おめでとうございます。

仁叟寺御本尊様釈迦三尊修復経過報告

日時	内容	場所	参加者
平成21年			
5月31日	御本尊様遷座法要 (修復事業及び志納勧募開始の法要と会議)	仁叟寺本堂・欣光閣	総代世話人全員60名
8月9日	総代人会議	仁叟寺欣光閣	総代人全員
9月14日	佛教造形研究所との修復契約調印	東京都・小津美術館(日本橋)	住職、本間所長他6名
9月28日	文化財修復申請書提出及び会議	高崎市教育委員会文化財保護課	副住職、市職員3名
10月1日	御衣木加持法要 (仏像修復の用材を供養祈禱)	山梨県・佛教造形研究所 河口湖工房	住職、総代長、本間所長他15名
10月13日	高崎市教育委員会文化財保護課調査視察	仁叟寺	高崎市職員、部長・課長他4名
10月13日	旧御本尊様業師如来遷座 (再修復の為、河口湖工房へ移動)	仁叟寺本堂	佛教造形研究所本間所長他1名
10月20日	高崎市都市計画課文化財視察	仁叟寺	市職員など関係者31名
10月26日	高崎市教育委員会文化財保護課調査視察 (仏像調査)	仁叟寺	市職員2名
10月30日	高崎市教育委員会文化財保護課調査視察 (本堂調査)	仁叟寺本堂	市職員2名
11月16日	高崎市教育委員会文化財保護課調査視察 (本堂調査)	仁叟寺本堂	市職員2名
11月25日	御本尊様釈迦三尊像遷座 旧御本尊様業師如来像遷座	仁叟寺本堂	佛教造形研究所本間所長他2名 佛教造形研究所本間所長他2名
11月25日	高崎市教育委員会文化財保護課調査視察 (業師如来・御本尊様)	仁叟寺	市職員2名
11月29日	総代世話人合同会議 (旧御本尊様業師如来御帰座と半年間の経過報告)	仁叟寺欣光閣	総代世話人全員60名
平成22年、平成23年			
-	年数度開催されます総代世話人合同会議 随時、進捗及び経過の報告をいたしました	仁叟寺欣光閣	総代世話人全員60名
平成24年			
3月23日	修復最終確認	東京都・佛教造形研究所	住職、副住職
4月2日	御本尊様釈迦三尊像遷座式	仁叟寺本堂	住職、東堂、副住職、総代人 佛教造形研究所本間所長他20名
4月2日	御本尊様釈迦三尊像修復支払い	仁叟寺本堂	住職、東堂、副住職、総代人 佛教造形研究所本間所長他20名
8月9日	御本尊様釈迦三尊像修復報告書到着	仁叟寺	佛教造形研究所
8月19日	総代世話人合同会議 (修復完了報告と修復開眼会法要の打合せ)	仁叟寺欣光閣	総代世話人全員60名
9月17日	御本尊様釈迦三尊像修復開眼会法要 (導師・曹洞宗宗務総長佐々木孝一老師)	仁叟寺本堂	全檀信徒
9月17日～23日	「仁叟寺の仏像展」	仁叟寺本堂	
-	文化財修復終了報告書提出	高崎市教育委員会文化財保護課	

仁叟寺木造釈迦如来坐像並びに木造阿難・迦葉立像修理及び台座・光背復元制作報告書

名称：木造釈迦如来坐像並びに脇尊木造阿難・迦葉立像
指定：高崎市指定重要文化財
員数：三尊並びに台座・光背六基
所有：曹洞宗天祐山公田院 仁叟寺 住職 渡辺啓司
所在：〒370-2123 群馬県高崎市吉井町神保1295 Tel 027-387-3080

当三尊について

当像は拈華微笑の釈迦如来坐像である。釈尊が靈鷲山に居られる時、大梵天王が金波羅華を獻じて衆生のために説法を乞うた。釈迦は座に上り華を拈じて(つまむ)衆生に示した。皆意味が分らず黙していると、迦葉だけが理解して微笑した。釈尊は迦葉の教えの理解の深さを知り、正法を迦葉に伝授した。この説話に基づき北宋時代に右手に蓮華を持つ釈迦の像が刻まれ、日本には禅宗の請来と共に伝わった。脇尊として阿難・迦葉が配された三尊仏として造られるが、作例は少なく目に触れることは多くない。禅の法門の奥義を具体的に示した貴重な作例と云える。

修理前状況と修復について

本尊釈迦坐像は格調高い中世像であるが、台座は江戸後期特有の楼阁型多層加飾蓮華座であり、また脇尊の光背も江戸後期の装飾過多の宝珠形光背であり、本尊との違和感は否定出来ず、尊容を大きく損なうものとなっていた。

三尊の台座は接着の膠の劣化により百数十ピースの接合部材の多くが離れ、また接合している他の全ての部材も軽い衝撃で簡単に離れ全体が崩壊する危険な状態にあった。また表面は糊である膠の劣化により下地からすべて浮上り剥落が進行していた。これ等の解体修理及び表面の復元には多額の費用が掛かるばかりでなく、復元しても重要な像との違和感は除去されず解体復元には疑問があった。

幸い仁叟寺誌発刊に合わせて行なわれた仏像悉皆調査の際、様式的法量的に本尊の旧台座のものと思われる蓮華部が発見され、本来は中世様式の多重蓮華座であったことが推定され復元が望まれていた。

ご住職さんと相談の結果、この際当初のお姿に復元しようと云うことになり、台座は中世様式の多重蓮華座、光背は中世の台座に合せ雲文透し光背を復元し造像当初の全体像の再現を図ったものである。

三尊は共に些程大きな像ではなく、大きな須弥壇上の空間構成的に、やや存在感に弱点があったので、本尊の台座・光背は大振りに造り、阿難・迦葉像の台座・光背は本尊に合せ多重蓮華座並びに雲文透し光背とし、三尊一体としての存在感の表出を図った。また表面は鎌倉時代の巧匠快慶が案出したと云われる中世の高度な技法である悉皆金色とし荘厳の度を深めた。悉皆金色の技法は、肉身部は金箔の上に金泥を塗り金の質感の変化を見せ、衣は箔押しの上に各種の盛上げ金模様や截金を全面に表わしたもので、金で統一された豪華で落ち着いた表現である。

■ 損傷状況

基本的に本尊台座と同様である。

1. 両像共各矧目は接着の膠分の劣化により全てゆるみ各所で離れ、全体の組付けによりかろうじて形を保っている状態であった。
2. 部材の亡失が各所に見られるが、阿難像では反花の受座側面の飾板全六面及び各コーナーの束柱六本の内四本亡失であった。迦葉像は同部の飾板は全面残存するが、束柱は二本亡失であった。また残存する四本中頭部を欠くもの二本であった。
3. 表面はドロ地漆箔仕上げであるが(框座はドロ地朱漆塗)、ドロ地は膠分の劣化により全面浮上り各所で剥落が生じていた。

光背

■ 形状及び品質構造

中央部を八葉透しとした円光背の周囲を雲文彫出の宝珠形の縁部で取り巻いた形である。台座と同時期の作と推定される。

■ 損傷状況

基本的にはドロ地の膠分による浮上り剥落が進行しつつあり、縁部にその兆候が認められた。しかし背面及び柄の部分の表面布貼り或いは紙貼り部分に於いて浮上り剥落が顕著であった。

阿難・迦葉像の光背としては違和感があり尊容を損なうものとなっていた。

修理仕様

■ 本尊釈迦如来坐像

解躰修理を行なった。

表面のドロ地は全て除去し、恒久性の高い古来の硬地漆箔古色仕上げとした。表面肉身部を鎌倉期から見られる金箔金泥仕上げとした。衣部は箔押し金地に、盛上げ金模様を全面に配した。

■ 台座

台座は残存の旧蓮華部を基に、中世様式の多重蓮華座に復元した。

■ 光背

光背は復元した中世様式の台座に合せ中世様式の雲文透し光背を復元した。

■ 脇尊阿難、迦葉立像

解躰組み直しを行なった。

表面は現在のドロ地を全て除去して恒久性のある硬地とし、肉身部は漆箔金泥仕上げとして衣は漆箔地に盛上げ金模様を配し、悉皆金色像仕上げとした。

光背

■形状

光背は台座と同時に江戸後期に造られたものと考えられる。頭身光部の周縁部を彫り出の雲文を表わした蓮弁形である。先端を細く長く前方に覆せるが、やや極端に過ぎ、本尊の中世の落ち着いた容姿とは違和感が否めない。頭身光部も朱漆を塗った江戸後期に見られる特異な形を示し、これも中世像の格調との違和感を助長している。

■品質構造

桧材、ドロ地、頭身光部朱漆塗、周縁雲文部ドロ地漆箔である。背面はドロ地黒漆塗。

■損傷状況

膠分の劣化により各材の矧付のゆるみが進行していた。また表面はドロ地が劣化して浮上り、剥落が縁先部等に認められた。現在はまだ大きな剥落には至っていないが、近い将来の加速度的進行が予測された。

II. 脇尊木造阿難・迦葉立像

■形状

両像共円頂。阿難像は胸前で合掌。通肩に納衣を纏い両裾を長く垂下させる。沓を履き左脚を僅かに前出させる。迦葉像は上半身裸身。老貌瘦軀。胸前で両手を握り合せ上体を前屈させる。草履を履き右脚をやや前に出す。

■品質構造

桧材。寄木造。玉眼嵌入。ドロ地。肉身部金泥彩、衣部漆箔仕上げ。

■損傷状況

寄木の接着は膠分の劣化による脆弱化の進行が認められるほか、ドロ地の膠分の劣化による浮上りが全体的に認められ、剥落が全身の各所で生じていた。特に阿難像の頭部に於いて顕著であった。

台座

■形状

両像の台座共 本尊台座と同様楼阁形多層装飾蓮華座であるが、本尊が十三層に対し、脇尊は十一層と少し低く抑えている。

■品質構造

基本的な造り方は本尊と同様である。

■ 損傷状況

基本的に本尊台座と同様である。

1. 両像共各矧目は接着の膠分の劣化により全てゆるみ各所で離れ、全体の組付けによりかろうじて形を保っている状態であった。
2. 部材の亡失が各所に見られるが、阿難像では反花の受座側面の飾板全六面及び各コーナーの束柱六本の内四本亡失であった。迦葉像は同部の飾板は全面残存するが、束柱は二本亡失であった。また残存する四本中頭部を欠くもの二本であった。
3. 表面はドロ地漆箔仕上げであるが(框座はドロ地朱漆塗)、ドロ地は膠分の劣化により全面浮上り各所で剥落が生じていた。

光背

■ 形状及び品質構造

中央部を八葉透しとした円光背の周囲を雲文彫出の宝珠形の縁部で取り巻いた形である。台座と同時期の作と推定される。

■ 損傷状況

基本的にはドロ地の膠分による浮上り剥落が進行しつつあり、縁部にその兆候が認められた。しかし背面及び柄の部分の表面布貼り或いは紙貼り部分に於いて浮上り剥落が顕著であった。

阿難・迦葉像の光背としては違和感があり尊容を損なうものとなっていた。

修理仕様

■ 本尊釈迦如来坐像

解躰修理を行なった。

表面のドロ地は全て除去し、恒久性の高い古来の硬地漆箔古色仕上げとした。表面肉身部を鎌倉期から見られる金箔金泥仕上げとした。衣部は箔押し金地に、盛上げ金模様を全面に配した。

■ 台座

台座は残存の旧蓮華部を基に、中世様式の多重蓮華座に復元した。

■ 光背

光背は復元した中世様式の台座に合せ中世様式の雲文透し光背を復元した。

■ 脇尊阿難、迦葉立像

解躰組み直しを行なった。

表面は現在のドロ地を全て除去して恒久性のある硬地とし、肉身部は漆箔金泥仕上げとして衣は漆箔地に盛上げ金模様を配し、悉皆金色像仕上げとした。

現状は漆箔仕上げであるが、如来、菩薩でない両者の像を金色相とするのは儀軌から外れる。しかし今回は本山の仕様に合せ現状の金色相を踏襲した。

■ 台座及び光背

本尊に合わせ中世様式の台座・光背を新補した。

■ 技法について

修理工程

1. 本尊釈迦如来坐像 浮上り彩色の除去
脇尊阿難・迦葉立像 旧彩色、金箔の除去
2. 各矧目全て離し解髹した。
3. 下地を除去し素地となった全部材に生漆を塗布して素地固めを行なった。
4. 小欠損部分はサビ漆や胡粉を用い、矧目のズレや隙間は木屎漆や人口木材で充填した。
5. サビ漆を塗りサビ研ぎを行い耐久性の強い古来の堅地仕様とした。
6. 黒漆(呂色漆)を塗った。
7. 全髹に金箔を押した。
8. 肉身部は金箔押しの上に漆で金泥(金消)を蒔いた。
9. 衣の部分にドーサ引きを施した。
10. 膠で溶いた盛上げ胡粉(胡粉+朱土)を作り紋様を描いた。
11. 盛上げ部に金泥を膠で溶いて塗った。
12. 金泥の上を必要な部分のみ瑪瑙棒でこすり艶を出した。
13. 不安定な足の通り柄を調整し足側に固定した。

■ 紋様について

今回描いた衣・袈裟の紋様の主なものは以下の通りである。

釈迦 袈裟 田相は無地(金箔のみ)
堅条・横堤・縁は蓮華(唐草)紋様。

阿難・迦葉 衣・袈裟(主な紋様)

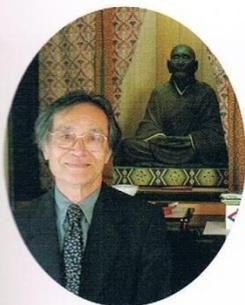
菱(花菱)・立涌・七宝(花七宝)・格子(斜格子)
幾何学文様(割付文様)・雲文(雲唐草・靈芝雲)
丸紋(靈芝雲の丸紋、宝相華の丸紋他)・団花文(宝相華団花文、菊花文)・
蓮華(唐草)文・鱗・石畳・波・矢絰(矢飛白)など

法 量 表

釈迦如来坐像					単位cm
本 躰		台 座		光 背	
像 高	32.0	高 さ	47.0	高 さ	64.0
膝 張	25.0	最大巾	65.0	巾	50.0
最大奥	23.5	最大奥	65.0	全高(台座+光背)	110.0

阿彌立像					単位cm
本 躰		台 座		光 背	
像 高	44.5	高 さ	23.0	高 さ	67.0
膝 張	15.0	最大巾	36.0	巾	31.0
最大奥	12.5	最大奥	36.0	全高(台座+光背)	90.0

迦葉立像					単位cm
本 躰		台 座		光 背	
像 高	44.5	高 さ	23.0	高 さ	67.0
膝 張	16.0	最大巾	36.0	巾	31.0
最大奥	16.0	最大奥	36.0	全高(台座+光背)	90.0



佛教造形研究所 所長

本間紀男(ほんま・としお) 彫刻家、仏像彫刻研究家

略歴

1932年1月 東京生まれ
 1956年3月 東京藝術大学美術学部彫刻学科卒業
 1958年3月 同大学同学部専攻科(彫刻)卒業
 1958年4月 同大学同学部彫刻科副手
 1966年4月~'70年3月 同大学同学部大学院保存技術講座文部教官助手
 1970年4月~'76年3月 同大学同学部同講座講師
 1976年4月~'94年3月 同大学同学部同講座助教授
 1984年 東京工業大学より工学博士号授与
 1968年~'96年 新制作協会彫刻部会員。新作家賞2度受賞

研究活動

彫刻制作(ブロンズ、木、乾漆)、日本古代彫刻技法の研究、仏像修復技法の研究。
 1982年、在外研究員として1年間米国に留学。研究テーマは「在米仏教彫刻の技法材質の研究」。主としてボストン美術館、メトロポリタン美術館収蔵品調査研究。1970~85年、インド、パキスタン、アフガニスタン、中国、モンゴル、韓国を度々訪問し、仏教遺跡の研究調査を行う。

所属団体

新制作協会(平成8年からフリー)、日本史学会、古文化財学会、保存修復業界、日本漆工史学会

論文ほか著作多数

佛教造形研究所

〒197-0825 あきる野市雨間1935-101
 tel 042-559-3373 fax 042-559-3920

修理前損傷狀況



釈迦如来



迦葉



阿難

修理前損傷状況



釈迦如来

袈裟の離れが見られる。



迦葉

衣垂下部の浮上がり剥落。



釈迦如来

表面の剥落、鼠咬による損傷著しい。



阿難

頭部の浮上がり剥落が顕著である。

解躰修理

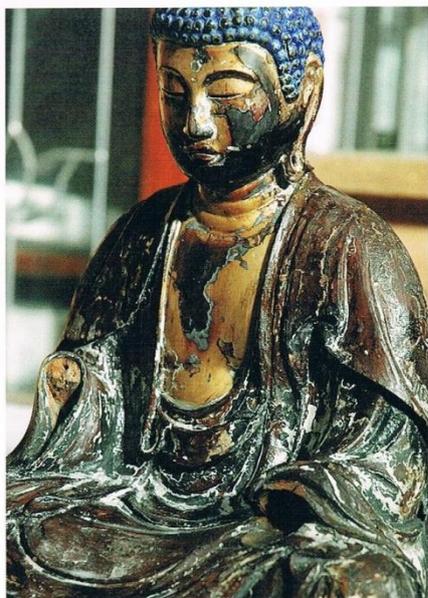
釈迦如来



表



裏



後補のドロ地を剥すと当初の表面が現れた。



欠損部、矧目の隙間に補材する。

解躰修理

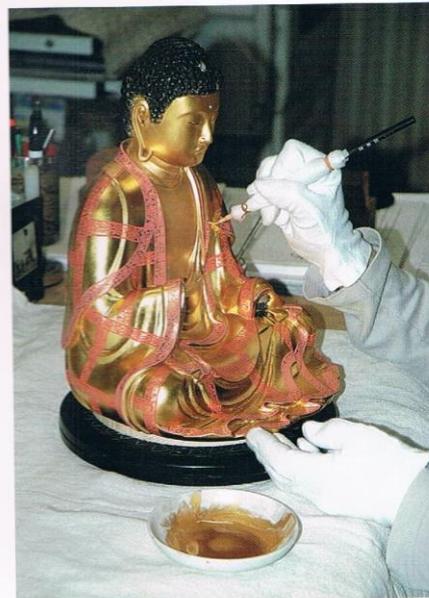
釈迦如来



傷んだ部分は下地からやり直し、黒漆を塗る。

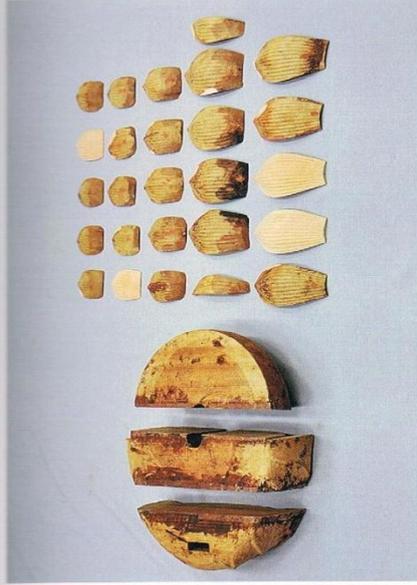


金箔を押す。



朱土を混ぜた胡粉で盛上げ文様を施す。

台座解体修理

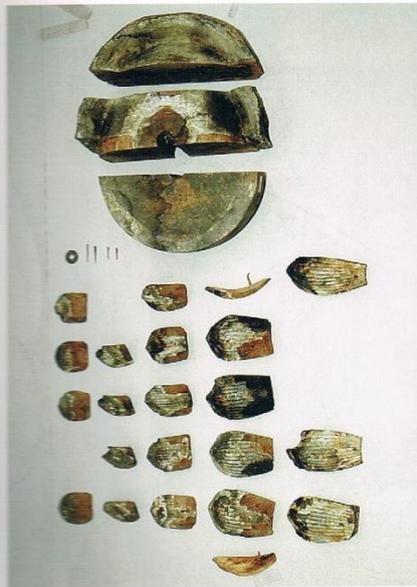


下口地を落す。欠損部を補材し、亡失した連弁は新補する。



釈迦如来

サビ漆で下地を施す。



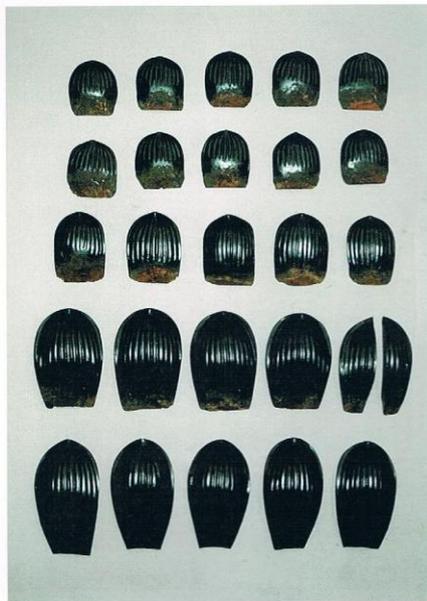
解体した連弁。



連弁の鼠咬による損傷。

台座解牀修理

釈迦如来



黒漆を塗る。



金箔を押す。

台座解体修理

釈迦如来



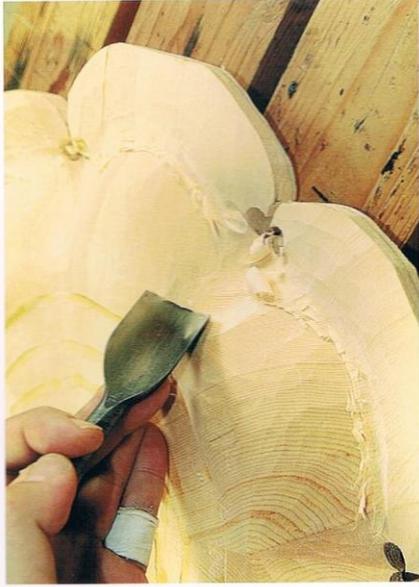
箱押完了。



連弁を仮葺きする。

台座新補

釈迦如来



花盤を木彫する。



黒漆塗が完了した花盤。



黒漆塗が完了した上反花。



木彫が完了した下反花。

台座新補

黒漆塗が完了した化粧。



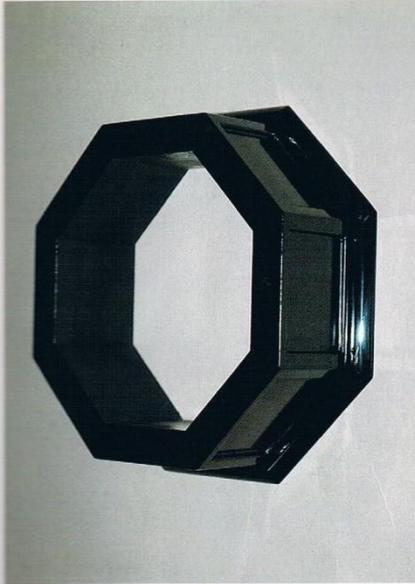
木彫が完了した下反花に木地固めの後サビ漆を塗る。

釈迦如来



上下框

木彫が完了した下反花。

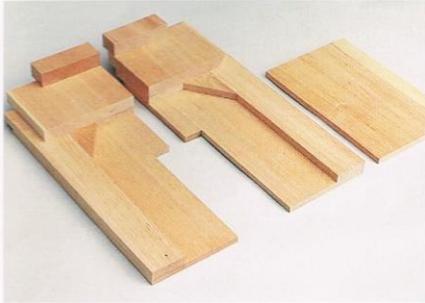


東



黒漆塗が完了した下反花。

光背制作



光背用材

釈迦如来



荒彫りをする。



雲文を彫刻する。



黒漆塗が完了した光背。

解体修理

阿難迦葉



表

阿難



裏

迦葉

解躰修理



黒漆塗完了

阿難

阿難迦葉



箔押し

迦葉



阿難

解躰修理



阿難 左側部の盛上文様。金泥を塗って完成。



阿難迦葉

迦葉 背部の盛上文様。様々な金盛上文様で装飾。



朱土を混ぜた胡粉で盛上げ文様を描く。



盛上げ部に金泥(金消)を膠で溶いたものを塗る。

葉

脇尊の台座制作

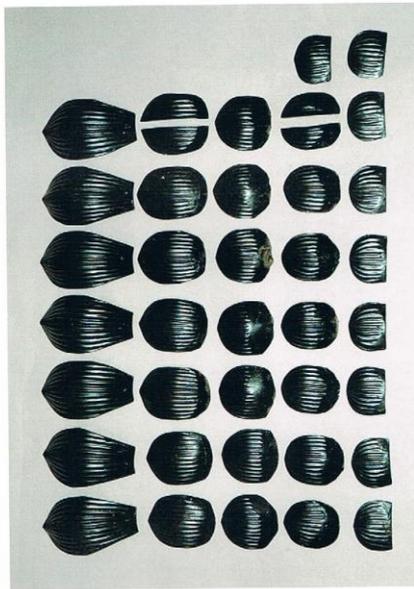
阿難迦葉



本尊の台座を模して脇尊の台座を作る。
サビ漆で下地を施した連弁を仮置した状態。

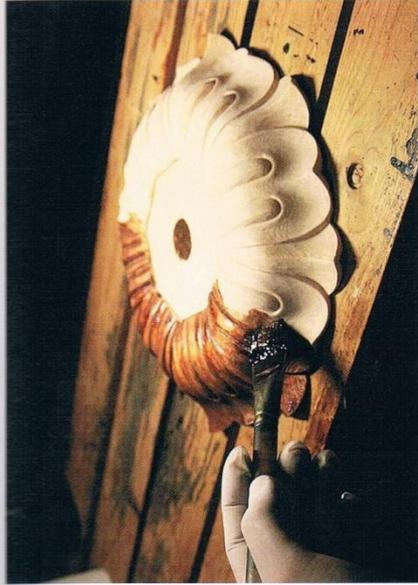


新たに制作した連肉と連弁。



黒漆塗が完了した連弁。

脇尊の台座制作

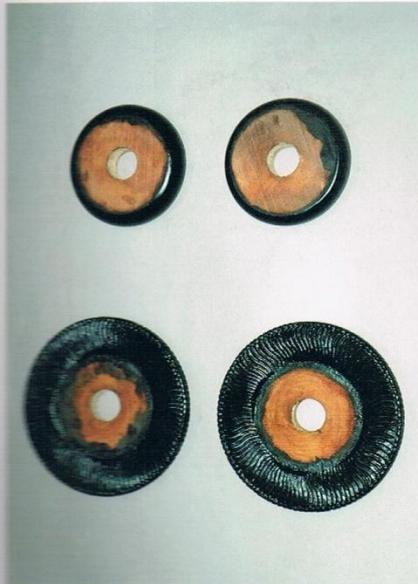


生漆を塗って木地固めをする。



阿難迦葉

サビ下地を研ぎ、黒漆を塗る。



黒漆を塗った面脇尊の蕊と歌茄子。



上下框

黒漆塗りが完了した蓮弁。

光背制作

阿難迦葉

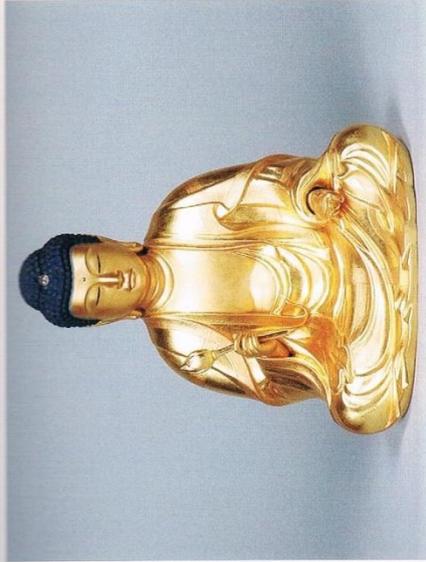


下地作業



黒漆を塗り、金箔を押す。

完成



釈迦如来



贈呈の墨書。(判読不能)



完成



迦葉



阿羅

完成

三尊像

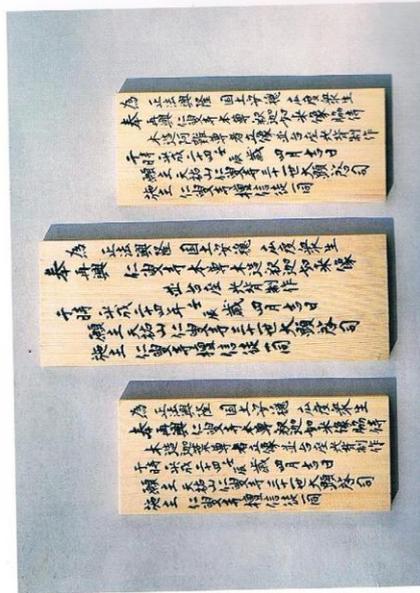


阿雅

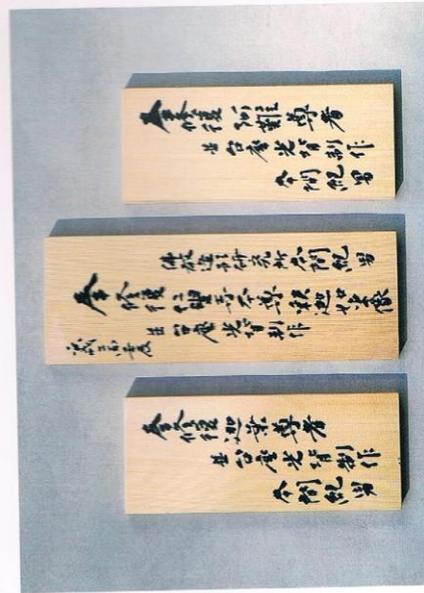
再興銘札



銘札を下框の裏に打ち付ける。

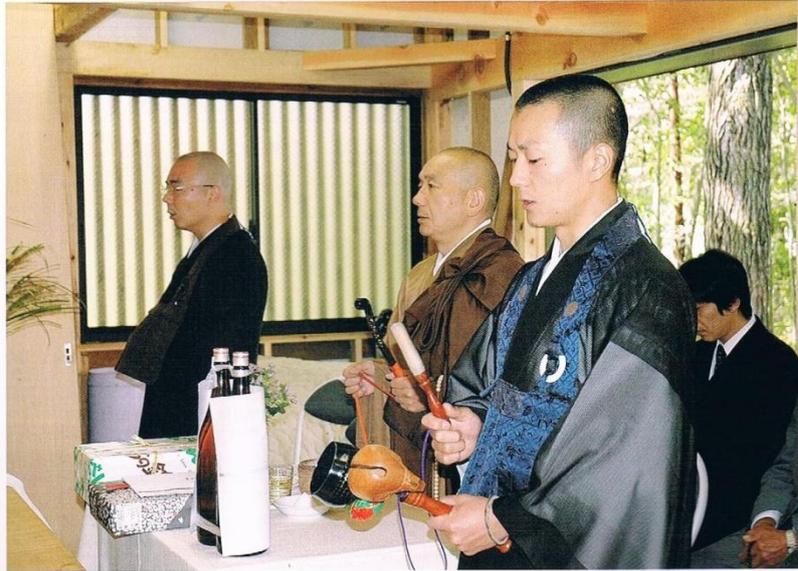


表



裏

御衣木加持



記念撮影

仁叟寺で行ったこれまでの御尊像修復報告（三十一世代）

番号	尊像名	安置場所	製作年代	修復年代	功德施主名(順不同・敬称略)
1	毘沙門天	欣光閣	江戸時代初期	平成15年	
2	文殊菩薩	文殊堂(本尊)	平成6年	平成19年	
3	不動明王	本堂	江戸時代後期	平成19年	
4	※薬師如来	本堂	鎌倉時代	平成19年	
5	文殊菩薩	坐禅堂(本尊)	桃山時代	平成20年	
6	阿彌陀如来	鳳寿堂(本尊)	江戸時代中期 (天明年間)	平成20年	
7	宇賀弁財天	欣光閣	江戸時代中期	平成22年	
8	妙見菩薩	開山堂	江戸時代中期	平成22年	
9	達磨大師	本堂	江戸時代初期	平成22年	
10	大権修理菩薩			平成22年	
11	※十一面観世音菩薩	本堂(観音堂)	室町時代	平成24年	
12	※聖観世音菩薩	本堂(観音堂)	室町時代	平成24年	

(※は高崎市指定重要文化財)

達磨大師



修復前



修復後

大権修理菩薩



修復前



修復後

本尊釋迦三尊像修復開眼會法要差定

大導師 全國總和会会長

曹洞宗宗務総長

佐々木孝一 老大宗師

三會上殿 三寶御和讃奉詠にてお迎え

七下鐘導師上殿

拈香法語

点眼 (如来十號三返)

普同三拜

淨道場 (八方散華)

献茶湯

摩訶般若波羅蜜多心經

消災妙吉祥陀羅尼 (三返)

回向

普同三拜

謝拜

垂示

散堂 聖號奉詠にてお見送り

檀信徒総回向差定

導師 堂頭

三會上殿 正法御和讃奉詠にてお迎え

七下鐘導師上殿

鼓鉢三通

拈香法語

普門品偈 (讀經中參列者焼香)

回向 (回向中讀込み)

鼓鉢三通

散堂 聖號奉詠にてお見送り

式典

記念写真

祝斎

平成二十四年九月十七日修行
仁叟寺御本尊釈迦三尊像開眼法要隨喜御寺院様(教区順)

- | | |
|-----------|----------------|
| 東京都 大林寺様 | 三中市 長傳寺様 |
| 前橋市 長昌寺様 | 安中市 長源寺様 |
| 前橋市 孝顕寺様 | 甘美町 寶積寺様 |
| 前橋市 西林寺様 | 甘美町 長善寺(西隣寺)様 |
| 前橋市 祝昌寺様 | 高崎市 全林寺様 |
| 高崎市 龍廣寺様 | 藤岡市 光徳寺様 |
| 高崎市 向雲寺様 | 藤岡市 廣澤寺様 |
| 高崎市 大森院様 | 藤岡市 興福寺様 |
| 高崎市 興禪寺様 | 神流町 松源寺(東福寺副)様 |
| 高崎市 龍傳寺様 | 神流町 龍源寺(龍松寺副)様 |
| 前橋市 釋迦尊寺様 | みなか町 常恩院様 |
| 桐生市 鳳仙寺様 | 長野県 法輪寺様 |
| 桐生市 大雄院様 | 高崎市 長松寺(副)様 |
| 桐生市 祥雲寺様 | 高崎市 向雲寺(副)様 |
| 太田市 大通寺様 | 藤岡市 良信寺(副)様 |
| 邑楽町 永明寺様 | 藤岡市 高源寺(副)様 |
| 邑楽町 高正寺様 | 長野県 信永院(副)様 |
| 館林市 茂林寺様 | 高崎市 龍源寺(仁叟寺副)様 |
| 明和町 宗龍寺様 | 高崎市 仁叟寺東堂様 |